

英語教材としての映画スクリプト (4)

— 問い返し疑問文に関して —

Movie Scripts for English Learning/Teaching Material (4)

— On the Echo Questions —

飯田泰弘

IIDA Yasuhiro

[キーワード Keyword]	問い返し疑問文、Wh疑問文、Wh移動、語順、映画英語
[所属 Institution]	岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要 旨 Abstract] 日本語と英語の間の重要な相違点のひとつに、語順がある。日本語はSOV言語であり、英語はSVO言語である。さらにWh疑問文の場合も、日本語はWh句の文頭・節頭への移動が任意である言語 (Wh-in-situ言語) だが、英語は移動が義務的な言語 (Wh-fronting言語) である。そのため、日本の英語学習者は、英語のWh疑問文を作る際、母語にはない作業を求められる。しかし英語でも、問い返し疑問文 (Echo Question) と呼ばれるタイプの疑問文があり、この文の場合はWh句が元位置に留まることが許される。つまりこのWh疑問文は、日本語のWh疑問文と似た語順になる。本稿においては、問い返しWh疑問文の特異性に注目し、この疑問文を活用すれば、日本の英語学習者が英語のWh疑問文を学ぶ際に、日英語の語順の違いに戸惑うことを少なくできる可能性を考える。また、口語英語で広く使われる問い返しWh疑問文の実例を観察するには、映画英語が役に立つことを指摘し、映画スクリプトの英語教材としての魅力にも迫る。

1. はじめに

日本語と英語の重要な相違点のひとつは、基本語順である。日本語はSOV言語であり、英語はSVO言語である。また日本語にはかきまぜ (scrambling) という操作が認められ、動詞が文末に来ることを維持すれば、(1)にあるように、他の要素の語順は比較的自由に変わることができる (e.g., Saito 1985)。一方で、文の文法性や意味解釈において語順が非常に重要である英語では、(2)に示したように、語順の入れ替えは厳しく制限される。

- (1) 日本語 (SOV & Scrambling)
 - a. ジョンは寿司を食べた。
 - b. 寿司をジョンは食べた。
- (2) 英語 (SOV & No-Scrambling)
 - a. John ate sushi.
 - b. * Sushi John ate. (with no special context)

この語順における違いは、Wh疑問文の場合も同様に現れる。日本語はWh句の文頭・節頭への移動が任意である言語 (Wh-in-situ言語) なので、(3a-b)の対比からわかるように、Wh句の位置は対応する要素 (この場合は「寿司」) がいた位置でも、(3c)のように文頭に現れても構わない。しかし、英語はWh移動が義務的な言語 (Wh-fronting言語) であるため、(4b)のように単文の疑問文の場合はWh句を文頭に置き、(4b)のような間接疑問文の場合も、埋め込み節の先頭にWh句を置く必要がある。¹ つまり日本の英語学習者は、英語のWh疑問文を学ぶ際に、Wh句の文頭・節頭への移動という、母語にはない義務的な統語操作を習得するこ

¹ 言語のなかには、節のタイプによってWhの移動が、義務的かどうかが変わるものもある。たとえばフランス語では、主節の疑問文ではWh移動が随意的だが、埋め込み節では義務的である。

とが求められる。

- (3) a. ジョンは寿司を食べた。
 b. ジョンは何を食べたの。
 c. 何をジョンは食べたの。
- (4) a. John ate sushi.
 b. What did John eat?
 c. Mary knows John ate sushi.
 d. Mary doesn't know what John ate.

日本の英語科教育の実情を見てみると、中学生向けの英語教科書『NEW HORIZON』の場合、1年生向けのEnglish Course 1のUnit 0の段階から、すでに次のような英語表現が登場している。

- (5) a. What's your name? 『NEW HORIZON English Course 1』(p. 4)
 b. What food do you like? 『NEW HORIZON English Course 1』(p. 5)

これらの英文も、元の語順はYour name is what.やYou like what food.であったものが、Wh句が文頭に移動して(さらに、主語助動詞倒置(Subject Auxiliary Inversion)やDo挿入(Do-insertion)なども経て)作られた疑問文である。つまり日本の英語学習者は、英語学習のかなり初期の段階から、文中におけるWh句の位置に注意を払う必要があることになる。

しかし英語には、問い返し疑問文(Echo Question)と呼ばれる疑問文があり、この疑問文ではWh句は元位置に留まることが許される。(4b)や(4d)が通常のWh疑問文であるとすれば、それに対応する問い返しタイプのWh疑問文は(6a)と(6b)になる。

- (6) a. John ate what?
 b. Mary doesn't know John ate what?

問い返し疑問文は、通常のWh疑問文に比べて、口語英語で使われるインフォーマルな表現とする見方もある。しかし、これらを“true question”であると指摘する研究者も少なくなく(e.g., Sobin 1990, Haegeman 1991)、単純に「周辺的な現象」として英語学習から切り捨てるようなものでは決してないと考えられる。さらに、通常のWh疑問文とは異なる興味深い特性の数々は、言語学でもさまざまな研究がおこなわれており、その特性のいくつかは、日本の英語学習者が母語の観点から英語を学ぶきっかけを与えてくれるものである。そこで本稿では、英語の問い返し疑問文を効果的に活かした、日本における英語の指導法・学習法を考える。

本論文の構成は以下である。まず2節では、問い返し疑問文の基本的特徴、および疑問文としての特異性に関して概観する。次に3節では、それらの言語的特徴を日本語のWh疑問文と比較し、類似点や相違点を確認する。4節では、広く口語表現で使われることから、問い返し疑問文は映画スクリプト上に多数登場すること、そして話者の感情が含意されることが多いという特性上、映像や音声と共に英語を観察できる映画英語を、英語教材として活用する利点を指摘する。5節は本稿のまとめである。

2. 問い返し疑問文の基本的特徴

問い返し疑問文に関する先行研究は多い。構文文法の観点からの分析(e.g., Ginzberg & Sag 2001, Culicover & Jackendoff 2005)、統語論の観点からの分析(e.g., McCawley 1987)、語用論やメタ言語からの分析(e.g., Horn 1989, Blakemore 1994, Noh 1998)など、分析方法もさまざまである。そのほとんどで共通して指摘される、問い返し疑問文の主な役割には次のようなものがある。

- (7) a. 相手の発言がよく聞こえないので、確認や明確化をする。
 b. 相手の発言が意外・心外な内容だったので、驚きや焦燥感を示す。

このような機能を果たす問い返し疑問文にもさまざまなタイプがあり、Huddleston & Pullum (2002)の例で見ても、大きく3つに分けることができる。下の各対話において、Bの発言が問い返し疑問文になる。

- (8) a. *Polar Echo Question* A : She is leaving on Saturday. - B : She is leaving on Saturday?
 b. *Variable Echo Question* A : He's proposing to resign. - B : He's proposing to what?
 c. *Alternative Echo Question* A : He gave it to Anna. - B : He gave it to Anne or Anna?

本稿で取り上げるのは、(8b)のWh句が現れるタイプである。

2.1 機能的特徴

問い返し疑問文の中でもWh句を使うタイプには、(i)相手の発言がよく聞こえないので確認や明確化をする、(ii)相手の発言が意外・心外な内容だったので、意外だったりした部分にWh疑問詞をあてて驚きや焦燥感を示す、といった機能がある。特に(ii)の場合は、相手に回答を求める一般的なWh疑問文というよりは、修辭的疑問文とも考えられる。

たとえば、次のAとBの対話を見てみよう。それぞれBの発言が問い返し疑問文である。

- (9) a. A : John ate sushi. - B : John ate what?
 b. A : John ate natto. - B : John ate what?

(9a)の疑問文の場合は、sushiの部分を(周りの騒音などで)聞き逃した場合に使うことができる。同様の使用法は(9b)の対話においても言えるが、(9b)のBの発言の場合は、nattoという食べ物の特徴から「Johnは納豆なんかを食べたの(信じられない)」といった、驚きや意外な気持ちを表す可能性も高い。このような話者の感情を表す機能は、What did John eat?というWh疑問文には基本的に備わっておらず、どうしても通常のWh疑問文で感情を表すためには、特別な発音のし方などが必要になる。

2.2 形態的特徴

次に形態的な特徴を見てみよう。語彙形成上も問い返しWh疑問文は、通常のWh疑問文にはない興味深い振る舞いを見せる。具体的には、まず(10)の例が示すように、先行する発言に合わせて、Wh句に屈折語尾の-ingを付けることができる。また(11)や(12)の例が示すように、語の中にWh句を挿入することもできる。この場合、(12Bb)の発言の非文性からもわかるように、語中にWh句が挿入されたからといって、その語全体を文頭に移動させ(さらにDo挿入などの文法規則を適用し)たとしても、通常のWh疑問文を作ることはできない。

- (10) A : He was enthusing about the film.
 B : He was whatting about the film? (Huddleston & Pullum 2002)
- (11) a. She believes in what-jacency? (Jonda 1985)
 b. John witnessed a great reve-what-tion? (Jonda 1985)
 c. Cha-what-as? (Janda 1985)
 d. He's un-what-able? (Hockey 1994)
- (12) A : She comes from Murwillumbah.
 B : a. She comes from Murwhatumbah?
 b. * Murwhatumbah does she come from? (Huddleston 1994)

2.3 統語的特徴

最後に、統語的な特徴をいくつか確認しておこう。まず、これまでも指摘してきたように、Wh-fronting言語である英語の疑問文にもかかわらず、Wh句が元位置に留まる点が最大の特徴と言える。つまり、Wh句の文頭への移動や、Do挿入や、主語助動詞倒置といった、通常のWh疑問文を作る際に必要な統語的操作が、一切不要なわけである。

第二の特徴としては、(13)の多様な例からもわかるように、問い返しWh疑問文を適用することができる文のタイプは多岐にわたる。そしてそのいずれの文タイプにおいても、Wh句は、尋ねたい要素の元位置にあることは明白である(例: She is a what? ⇔ She is a magician.)。² 英語学習者にとってみれば、とりわけ、(13b)のような英文が(この場合の用法においては)文法的だとされる事実には驚くだろう。

- (13) a. She's a what? (Declarative)
 b. Did who answer the phone? (Closed interrogative)
 c. Where did she put what? (Open interrogative)
 d. Give the what to Annie? (Imperative)
 e. How well she dealt with whose question? (Exclamative) (Huddleston 1994: 427)

第三に、主語と動詞の数の一致現象に関する興味深い事実がある。つまり、通常は単数扱いをする主語のwhoに対して、問い返しWh疑問文の場合は、複数のareを後続させることが許容されるのである。まずは(14)の例で、gatherやassembleやbe alikeといった動詞や形容詞を用いた英文を見てみよう。これらの表現はその意味的特性から複数を表す主語が必要になるが(例: * John is gathering in the park.)、whoが主語の場合はその規則よりも、whoを単数扱いするという規則が優先され、isが選択されることがわかる。

- (14) a. Who {is/*are} gathering in the park?
 b. Who {is/*are} assembling in the park?
 c. Who {is/*are} alike? (久野・高見 2004: 83)

しかし、次の問い返しWh疑問文を見てみると、先行する発言に合わせて、whoの後ろにareが後続することが許されている。この容認性の向上からも、問い返しWh疑問文は本質的に、問いたい要素の位置にそのままWh句を置くだけの文であるとわかる。

- (15) A : I think the graduating seniors are gathering in the park now.
 B : a. (?) You think who are gathering in the park now?
 b. You think who is gathering in the park now? (久野・高見 2004: 92)

第四の特徴は、問い返しWh疑問文では、句の一部のみをWh句で置き換え可能である点である。本来ならWh句は、句単位のものとして置き換えられ、たとえば名詞句a tall boyであれば、この3語すべてがwhoになる。しかし(16Ba)では、a newをそのままにして、名詞句の主要部であるmacroのみがwhatに置き換わっている。(16 Bb)が示すように、a new whatというかたまりは、もちろん通常のWh疑問文では使えない。

- (16) A : I've just created [a new macro].
 B : a. You've just created [a new what]?
 b. *[A new what] have you just created? (Huddleston 1994: 432)

² (13c)ではwhatが、(13e)ではwhoseが、問い返し疑問文としてのWh句である。

統語的特徴の最後に、通常のWh疑問文で観察される、Wh移動の制約を受けない点を確認しておこう。Ross(1967)以降、英語では特定の場所からのWh句の抜き出しができないことが知られている。その特定の場所には複合名詞句や等位構造があり、それらからWh句を抜き出せない事実は、複合名詞句制約 (Complex NP Constraint) や、等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint) と呼ばれる。(17)や(18)の非文性は、これらによって説明される。³

- (17) a. *The man who I need [_{NP} a statement which was about *t*] is sick. (Ross 1967: 119)
 b. *Which paper will you talk with [_{NP} the student who wrote *t*]? (久野・高見 2004: 90)
- (18) a. *What sofa will he put the chair between [some table and *t*]? (Ross 1967: 158)
 b. *Which book did John like to read [*t* and the article]?
 c. *Which book did John like to read [*t* and *t*]?

しかし、問い返しWh疑問文の場合は、(19)と(20)で示す文の文法性からわかるように、いずれの移動の制約にも抵触しない。これらのWh移動制約の回避の事実は、問い返しWh疑問文の大きな特徴と言える。

- (19) A : I will talk with the student who wrote that paper].
 B : You will talk with [the student who wrote which paper]? (久野・高見 2004: 91)
- (20) a. You saw [John and who]?
 b. You saw [who and John]?
 c. You saw [who and who]? (久野・高見 2004)

2.4 問い返し疑問文の特徴のまとめ

ここまで観察してきたように、問い返しWh疑問文は、通常のWh疑問文とは異なる特性を持つことがわかる。その特異性は、機能的、形態的、そして統語的な点から観察できた。こういった現象は、英語をある程度マスターした日本の英語学習者にとっても驚愕の事実になるものも多く、下手をすると、不要な混乱を招くこともあり得る。しかし一方で、このような問い返しWh疑問文の特性を効果的に活用すれば、日本の英語学習者が母語である日本語との比較から、英語をさらに深く学ぶきっかけにできる可能性があると考えられる。この点に関して、次節で議論をおこなう。

3. 英語の問い返しWh疑問文と日本語の比較

1節で指摘した通り、日本語と英語では、Wh句の移動の義務性に関して、大きな違いがある。英語ではWh句の移動は義務的である一方で、日本語ではWh句の移動は任意であり、元位置にWh句を置くだけでも文法的な疑問文を作ることができる。

- (21) a. What did John eat *t* ?
 b. John ate what? (Echo Question)
 c. ジョンは何を食べたの。
 d. 何をジョンは食べたの。

少し視点を変えれば、日本語の(21c)の文法性が意味することは、元位置にWh句が留まる英語の(21b)の問い返しWh疑問文は、日本語母語話者にとっては不思議ではない語順と考えることができる。むしろ日本の英語学習者にとっては、Do挿入や動詞を原形に変えるといった作業が必要な(21a)のWh疑問文を作るほうが、負担が大きくなっている可能性は高い。

³ 文中に示す“*t*”は、移動前の元位置を示すための痕跡 (trace) である。

さらに、英語の問い返しWh疑問文では、Whの移動制約に抵触しなくなるという、(19)や(20)でみた言語事実を思い出そう。これらは、英語の通常のWh疑問文と比べれば驚きの現象かもしれない。しかし、日本語のWh疑問文と比較した場合は、また様子が異なる。なぜなら日本語の場合は、複合名詞句の中のWh句を問うことも、等位接続構造の中のWh句を問うことも、まったく問題なくできるのである。下の(22)および(23)が、それぞれの事実を示している。

(22) 複合名詞句

- a. 太郎は [あの本を読んだ人] に会った。
- b. 太郎は [何を読んだ人] に会ったの。

(23) 等位接続構造

- a. 僕は [寿司とキムチ] を食べた。
- b. 君は [寿司と何] を食べたの。
- c. 君は [何とキムチ] を食べたの。
- d. 君は [何と何] を食べたの。

ここで考えたい点は、(i) Wh句は元位置に置いておけばいい、(ii) 複合名詞句の中のWh句を問うことができる、(iii) 等位接続構造の中のWh句を問うことができる、といった英語の問い返しWh疑問文の性質は、日本語のWh疑問文との共通点であるため、通常の英語のWh疑問文よりも、日本語母語話者にとっては受け入れられやすい可能性が高いことである。逆に言えば、英語の通常のWh疑問文が持つ、(i) Wh句を文頭に出し、Do挿入や主語助動詞倒置をする、(ii) 複合名詞句の中のWh句は問えない、(iii) 等位接続の中のWh句は問えない、といった性質のほうが、日本の英語母語話者にとっては、高度で難解な作業や言語事実だと捉えられる可能性がある。

1節で触れたように、日本の英語科教育においては中学1年生の教科書から、What's your name?やWhat food do you like?といったWh疑問文が登場するため、Do挿入や主語助動詞倒置といった文法規則の理解も、英語学習のかなり序盤で必要になる。しかし、そもそも外国語の学習においては、まずは母語との類似点を感じつつ、次に相違点にも意識を配りながら学びを進めるほうが、相違点ばかりを提示される学習法よりも効果的だと考えられる。このような学習法を追求する場合、たとえば英語のWh疑問文の学習においては、問い返しWh疑問文を活用することは、大いに意義があるものと言える。

しかしここで課題となるのは、現在の英語教材では問い返しWh疑問文の例が提示されることはほぼ皆無であり、せつかくの日本語との共通点が観察できる英文に触れることが困難である点である。そこで以降では、英語の補助教材として、映画英語を活用する点について考えたい。

4. 実例提示としての映画英語の魅力

前節まで、英語の問い返しWh疑問文の特性を確認しながら、特異に感じられるこの英語のWh疑問文が、日本の英語学習者にとっては有益な言語資料になりえることを指摘してきた。しかし同時に、日本の英語科教育で使われる教材では、問い返しWh疑問文に触れる機会がほぼ無い点を指摘した。確かに周縁的な現象と言える問い返しWh疑問文を、授業で時間を割いて提示するまでの必要性はないだろう。そこで本節では、映画を補助教材的に用いて、問い返しWh疑問文の提示を行うことを提案する。

映画英語を使う利点は複数ある。まず、映画は娯楽のために製作されるものであるため、学校英語の教科書には載らないような、くだけた、それでいて興味深い英語の言語現象を多く採取することができる。口語英語で広く使われる問い返しWh疑問文の実例を見るには、映画は最適の教材と言える。さらに映画を使えば、音声と映像を伴った英語を提示することができる。先に触れたように、問い返しWh疑問文には、驚きやいらだちといった、話者の感情が含意されることが多い。そのため、話者の表情が視覚的に確認でき、驚いた話者の声色なども瞬時に感じ取れるという点で、映画が果たせる役割は大きい。

映画で観察された実際の問い返しWh疑問文の例を見ていこう。まず(24)の会話では、多くのwhatが生起し

ている。最後のBのmisunderstandの言葉が物語るように、このシーンではAとBの会話は破綻している。その点が、話者の驚きやいらだちといった感情が含まれた、問い返しのwhatが頻繁に使用されることからよく伝わってくる。

- (24) A : I bring you here, look you in the eye, tell you what's what, and what?
 B : What?
 A : What "what"?
 B : What what? Nothing. You said "what" first.
 A : I didn't say what, I asked you what.
 B : No, you said "and" then, "what"? And, I said "what"?
 A : No, I said "what what", like what what?
 B : You said "what" first.
 A : Now, you're making fun of me?
 B : No, no no no no. You misunderstood. (Shark Tale, 2004)

下の(25)の各例は、クイズ番組のシーンから採取したものである。そもそも口語表現で多く見られる問い返しWh疑問文ではあるが、実際はフォーマルな書き言葉で確認できることもある。その一例が、W句で問うべき内容を明確にする必要性が非常に高い、試験の指示文や問題文である。Quiz Questionなどと呼ばれるこのような疑問文は、厳密には先行発言を「問い返す」タイプの疑問文ではないが、Wh句が元位置に生起する点では、問い返しWh疑問文と同じである。クイズ番組などでもよく耳にするQuiz Questionを通して、日本の英語学習者は、英語の試験形式を知ることが可能になる。

- (25) a. In depiction of God Rama, he is famously holding what in his right hand?
 b. The song "Darshan Do Ghanshyam" was written by which famous Indian poet?
 c. On an American One Hundred Dollar Bill, there is a portrait of which American statesman?
 d. Cambridge Circus is in which UK City? (Slumdog Millionaire, 2008)

Quiz Question同様に、先行発言がなくても、端的に情報を得たい場合は移動のないWh疑問文が使われることがある。そういう点では、非常にインフォーマルで、口語英語特有の表現形式と考えることもできるが、実際の英語のWh疑問文の知識を深めるうえでは、(26)のような英語の実例も大事である。

- (26) We are meeting again when? (The West Wing, S4, Ep7, 2002)

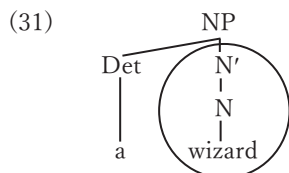
形態的な特異性も、映画の実例を通して観察することができる。(27-29)の各例においては、難解な語の一部を、Wh句で問い返していることが明らかである。3節で確認したように、こういったWh句は問い返しWh疑問文でのみ使えるものである。

- (27) Dr. Cawley : Chlorpromazine. I'm not a fan of pharmacology, but I have to say in your case.
 Teddy : Chlorapro...Chloraproma-what? (Shutter Island, 2010)
 (28) Doctor : What you are experiencing are symptoms of prosopagnosia.
 Husband : Sorry, proso-what? (Faces in the Crowd, 2011)
 (29) A : Electro-what?
 B : Electroporator. (Zoo, S1, Ep10, 2016)

統語的な特徴を確認することもできる。次の例では、動詞句や名詞句の中において、補部や主要部のみを

wh句に変える現象が見られる。特に名詞句の場合は、(31)で示した構造の主要部のみがwhatになっており、このようなWh句での置き換えは、問い返しWh疑問文のみで許されるものである。

- (30) Hagrid : Didn't you ever wonder where your mum and dad learned it all?
 Harry : Learned what?
 Hagrid : You're a wizard, Harry.
 Harry : I'm a what?
 Hagrid : A wizard. (*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 2002)



加えて(30)の会話では、Harryは非常に驚きながらI'm a what?の問い返しWh疑問文を発している。これは話者の驚きなどが含意されるという、問い返しWh疑問文の特徴を如実に表すものである。このような、話者の感情が容易に、かつ確実に感じ取れる点は、映画英語の魅力である。⁴

通常のWh疑問文では許されないWh移動が、問い返しWh疑問文の場合は容認されるという事実も、次の例で確認できる。(32)では、等位接続の構造の中に2つのWh句が生起している。3節で触れたように、これも問い返しWh疑問文だからこそ認められる文である。このような英文を、同じく等位接続構造のWh句を問うことが可能である日本語の文に訳させてみるのも、日本の英語の学習者にとっては、両言語の類似点や相違点を知る貴重な機会になると考える。

- (32) Dr. Cawley : A moral fusion between law and order and clinical care.
 Chuck : Pardon me, Doc. A what between [what and what]? (*Shutter Island*, 2010)

最後に、感嘆詞の後に続く例を紹介しよう。次の例は、先行する発言でHuhと相手がため息をついたことで、発せられたWh疑問文である。このような例は当然、教科書など一般的な英語教材には出てこないが、日常の英語の会話をリアルに描く英語の実例と言える。

- (33) A : Huh.
 B : Huh what? (*Zoo*, S1, Ep7, 2015)

以上本節では、映画には問い返しWh疑問文のさまざまなタイプの実例が多数観察できること、および、話者の感情が含意される疑問文を学ぼうと、映像や音声を伴う映画英語は大きな利点を持つことを指摘した。こういった性質は一般的な英語教材にはほとんどなく、映画の教材としての魅力を示すものと言える。

5. まとめ

本稿では、まず問い返しWh疑問文の特性を機能的、形態的、統語的な観点から概観し、そのうえで日本語のWh疑問文との比較をおこなった。そして、日本語のWh疑問文との重要な類似点を指摘したうえで、日本の英語学習者にとってはこの問い返しWh疑問文が、母語である日本語の知識を活かして英語学習ができるよ

⁴ 問い返しWh疑問文でありながら、冠詞が先行発言から変わる例もある。次の例では、anがaになっているが、このような例の分析は稿を改めたい。

- (i) A : Look, the lensing around these edges is characteristic of an Einstein-Rosen Bridge.
 B : A what? (*Thor*, 2011)

うになるという点で、有益な言語資料になることを指摘した。また、一般の英語教材には記載が少ないこのタイプのWh疑問文を、幅広く深く知るためには、映画を教材として使うことが有効的であることも、多くの実例を用いて述べた。

最後に、今後の展望を述べておきたい。問い返し疑問文は、(13)で確認した通り、さまざまなタイプの文に適用することが可能である。さらに(34)で示すように、問い返しWh疑問文でWh句にできる対象はかなり幅広く、岩田 (2012: 156) の言葉を借りれば「それこそ何でもあり」な状況である。

- (34) a. The dog wanted to eat the apple.
 b. The dog wanted to eat the what?
 c. The dog wanted to eat what?
 d. The dog wanted to what?
 e. The dog what?
 f. The what?
 g. What?

(Bolinger 1987: 263)

このような事実を提示すれば、英語学習者が英語の文法規則を超えて、コトバの柔軟性にも気づくようになることが期待できる。これは英語科教育において、英語という言語のみならず、コトバの本質を学ばせるという点から、非常に望ましいことである。

また本稿では、Wh句を使う問い返し疑問文にのみ焦点を当てたが、Yes-No疑問タイプの問い返し疑問文も、多くの特異性を示すことが報告されている。主なものを挙げると、(i) 疑問文においてanyではなくsomeの使用が求められる、(ii) 誤った複数形と知りながら、誤用を使う場合がある、(iii) 誤った発音と知りながら、おかしい発音をすることがある、などである。下の(35-37)に挙げる例が、それぞれの具体的な実例である。

(35) A : So you finally managed to solve some of the problems.

B : Managed to solve {some/*any} of the problems? I solved all of them, in two minutes.

(岩田 2012: 140)

(36) A : We trapped two mongeese.

B : You trapped two mongeese? You mean 'mongooses'.

(Noh 1998: 610)

(37) A : Did you call the POLice?

B : I didn't call the POLice. I called the poLICE.

(Horn 1989 Chap. 6/Noh 1998: 612)

こういった英語の実例も、コトバの柔軟さを知るという点においては非常に貴重なものに違いない。これらの実例を、英語科教育においていかに活用するか、また映画英語にどのような実例を見つかることができるか、などに関しては今後の課題としたい。

参考文献

- 岩田彩志 (2012) 『英語の仕組みと文法のからくり - 語彙・構文アプローチ-』 開拓社。
 久野暉・高見健一 (2004) 『謎解きの英文法 - 冠詞と名詞-』 くろしお出版。
 Blakemore, Diane (1994). Echo Questions: A Pragmatic Account, *Lingua* 94, pp. 197-211.
 Bolinger, Dwight L. (1987). Echoes Reechoed. *American Speech* 62 (3), pp. 261-279.
 Culicover, Peter W. & Jackendoff, Ray (2005). *Simpler Syntax*, Oxford University Press.

- Ginzburg, Jonathan & Sag, Ivan A. (2001). *Interrogative Investigations: The Form, Meaning, and Use of English Interrogatives*, Stanford Univ Center for the Study.
- Haegeman, Loliene (1991) *Introduction to Government & Binding Theory*, Blackwell, Oxford and Cambridge, MA.
- Hockey, Beth Ann (1994). Echo Questions, Intonation and Focus. In Peter Bosch and Rob van der Sandt (Eds.), *Focus and Natural Language Processing, Volume 1: Intonation and Syntax*. Heidelberg: IBM.
- Horn, Laurence R. (1989). *A Natural History of Negation*, University of Chicago Press.
- Huddleston, R. (1994). The Contrast between Interrogatives and Questions. *Journal of Linguistics* 30, pp. 411-439.
- Huddleston, Rodney & Pullum, Geoffrey K. (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Janda, Richard D. (1985). Echo-questions are Evidence for What?. *CLS*21, pp. 171-188.
- McCawley, James D. (1987). The Syntax of English Echoes. *CLS*23, pp. 246-258.
- Noh, Eun-Ju. (1998). Echo Questions: Metarepresentation and Pragmatic Enrichment. *Linguistics and Philosophy* 21, pp. 603-628.
- Ross, John. R. (1967). *Constraints on Variables in Syntax*. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Saito, Mamoru (1985). *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*, Doctoral dissertation, MIT.
- Sobin, Nicholas (1990). On the Syntax of English Echo Questions, *Lingua* 81, pp. 141-167.

教科書

NEW HORIZON English Course 2, 東京：東京書籍, 2020.

映画

- Bergeron, B., Jenson, V. & Letterman, R. (Directors). (2004). *Shark tale*. [Motion picture]. United States: DreamWorks Animation.
- Boyle D. & Tandan, L. (Directors). (2008). *Slumdog Millionaire* [Motion picture]. United Kingdom & United States: Celador Films.
- Branagh, K. (Director). (2011). *Thor* [Motion picture]. United States: Paramount Pictures.
- Columbus, C. (Director). (2001). *Harry Potter and the Sorcerer's Stone* [Motion picture]. United Kingdom & United States.
- Gayner, A. H. (Director). (2015). Wham, Bam, Thank You Sam [Television series episode]. *Zoo*, Production companies.
- Linka, L. (Director). (2002). Election Night [Television series episode]. *The West Wing*, United States: John Wells Productions & Warner Bros. Television.
- Magnat, J. (Director). (2011). Faces in the Crowd [Motion picture]. United States, France, Canada & United Kingdom: Minds Eye Entertainment.
- Moore, C. (Director). (2015). Emotional Contagion [Television series episode]. *Zoo*, James Patterson Entertainment.
- Scorsese, M. (Director). (2010). *Shutter Island* [Motion picture]. United States. Paramount Pictures